今月の PICK UP

『室町ワンダーランド』　清水 克行／著　文藝春秋　210.4シ

本書は室町時代から戦国時代を専門に研究している著者による歴史エッセイです。琵琶湖の海賊、忍者の里甲賀に存在した200以上もの城、日吉社（現在の日吉大社）の神使である7匹の猿、現代マンガの起源と思われる描写が残る石山寺所蔵の絵巻物など、滋賀にまつわる内容もいくつか含まれています。過去と現代の比較も含めつつ、各テーマが数ページ程度でまとめられているため、読み進めやすい内容となっています。日本中世史における生活様式や政治の様々な側面を知ることができる1冊です。

【本館所蔵】

司書のおすすめ

『生きものがつくる美しい家 動物たちのすごい巣121』
鈴木 まもる／文・絵 エクスナレッジ　481.7ス

巣と言うと鳥の巣を思い浮かべる方が多いかもしれませんが、本書には鳥の他に、動物、昆虫、深海生物などの巣が紹介されています。例えば、その作り方が気になる湖面に浮かぶ巣、オスが作る巣の出来具合をメスがチェックする巣、にせの出入り口のある巣など多種多様で、外観、内部のつくり共完成度に驚かされるばかりです。画家・絵本作家でもある著者による美しいイラストにも注目してください。　【本館所蔵】

『鉄道文学傑作選』　関川 夏央／編 中央公論新社　918.6セ

鉄道文学と聞いて、どんな作品を思い浮かべますか？ 本書は、明治から昭和の文豪17名の文章を収めた、バラエティーに富んだ編集になっています。鉄道だからこそ生まれた車窓からの風景や客車内での人間模様など、さまざまな作品を彩ってきた鉄道の魅力が紹介されています。10月14日は「鉄道の日」です。鉄道文学に触れてみてはいかがでしょうか。

【本館所蔵・2階全集コーナーにあります】

『生きとってもしゃーないと、つぶやく96歳のばあちゃんを大笑いさせたお医者さん』
中 大輔／著 ユサブル　494.5ナ

「がんが治ってもいずれ死にます。人間は絶対に死ぬんです。だから〝生きるか死ぬか〟なんて選択はない。あるとしたら〝どう生きるか〟という選択肢しかないんです」と語る、自身もがんを経験した船戸医師。そんな船戸医師の胸の内に迫ったこの本は、彼の人となりや熱意をもって働く姿が描かれています。豪快に笑い、患者にも笑うことは大事だと説き、とことん人と向き合う様に心打たれます。　【本館所蔵】

『体育がきらい』　坂本 拓弥／著 筑摩書房　780サ

「体育哲学」を専門とする著者が、体育をきらいになってしまう原因や背景について正面から考えた1冊。自分の体や動きを見られるのが嫌、体育の先生が苦手、勝ち負けがつくのがプレッシャー、そもそも体を動かすこと自体がきらい……細かく分けて考察していくうちに、「『体育』なんて好きにならなくてもいい」という著者の真意が見えてきます。　【本館所蔵】